家康

徳川家康 10

続明星碎くの巻
静波の夢の巻

山岡荘

続明星瞬くの巻・難波の夢の巻

愛

山岡荘八

講談社

徳川家康　第十巻　続明星瞬くの巻　難波の夢の巻　昭和四十年六月十五日　第八刷発行　著者　山岡荘八　発行者　野間省一　印刷所　凸版印刷株式会社　製本所　株式会社大進堂　発行所　株式会社講談社　東京都文京区音羽町三ノ一九　振替　東京三九三〇　電話　東京（九四二）一一一一（大代表）
©山岡荘八　一九六三
定価　六百二十円

徳川家康 10

続明星瞬くの巻
難波の夢の巻

目次

続明星瞬くの巻

虎と虎　七

弥陀の光　二五

出陣　四〇

第四の凶兆　五二

瓜畑見立　六三

巨木と美女　八一

星騒ぐ　一〇〇

輪廻の音　一一〇
難波の夢の巻
老いの愛児　一三四
聚楽の奥　一四九
苦悶の太閤　一六〇
歴史は移る　一八一
黒幕たち　一九七
吉野詣で　二一二
破局　二三二

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com

秀次地獄　二五〇
肉親颱風　二六七
高野の雨　二八二
畜生塚　二九三
和議の幽霊　三〇四
わかれ路　三一五
醍醐の桜　三二六
最後の決闘　三五〇
飛び火植民　三六一

付　録（参考地図及び諸家系譜）

装幀　稲垣行一郎
挿画　木下二介
箱裂地　麻地草花人家文様茶屋染
提供　山口勉
表紙金版　徳川家康直筆署名

徳川家康

10

続明星瞬くの巻
難波の夢の巻

続 明星瞬くの巻

虎と虎

一

このあたりでは、淀屋常安を町人関白と呼んでいる。町人でありながら秀吉に劣らぬほどの器量と見立てた褒め言葉であった。

しかし肝の太さにおいては博多の島井宗室は淀屋を超えているかも知れない。

以前から神谷一族と結んで、交易ばかりでなく、鉱山の発掘から精錬、廻船、金融とあらゆる事業に手を伸して巨富を積んでいるうえに、その私生活はきわめて質素であった。

始めから大きな器に生れついたという型の男ではなく、きびしく鍛えに鍛えを重ねて磨き出された型の男で、淀屋を秀吉にたとえるならば、これはさしずめ家康に擬すべきものと蕉庵は睨んでいた。

「——人の嘘ついた尻ぬぐい。これも宗家の先代と言い交したこともあれば是非もない」

宗室はからりとした表情で言って蕉庵の別荘から出てゆくと、わずか三人の手代を連れて大和橋の船着場に向った。

自分の船は堺の浜手に繋いでおいて、ここから淀屋の船で大坂へ向うのだった。両側の河岸にはいっぱい穂をつけた葭が繁り、その中に鴨の群が点々とおりている。

淀屋の三十石船は、彼のために、緋毛氈の敷物を整え船べりに幔幕を張って待っていたが、それに乗り込むと、わざわざ幕をあげさせて、あたりの秋景に眼を細めた。

丸に淀の字を染めぬいた印ものをまとった曳き手が、今日は四十人あまりもつけられている。

考えてみると町人という存在の奇怪さに宗室は思わず唇をゆがめて笑った。

戦は武将にさせながら、金儲けは商人がする。一方はたくさんの武士を養わなければならないのに、一方はその必

要がないのだから金は蓄るばかりであった。
その不都合さに気付かせまいとして、秀吉に交易の利と鉱山をすすめたのが、言わば今度のことの原因のような気がする。
秀吉に掘らせた各地の金山から、いささか金が出過ぎたのだ。
（これはもう少し手許不如意にさせておく方がよかったのかも知れぬ……）
武将はあまり富ませるべからず、さりとて餓えさせては狼のように喰いつき合う……その辺にむずかしさがあったのだと宗室は思った。
言わば罪ほろぼしのつもりで秀吉に鉱山を掘らせたのが、めぐりめぐって、今日の宗室たちをこんな立場に追い込んだ。
淀屋にしても、大軍団を朝鮮に派遣するゆえ、その糧食を……と、なったら、こんどは儲けよりも貸が多くなって困るであろう。
それにしても武将は計算にうといものだった。各自の禄高は計算出来ても、巨商の財産はどれほどあるのか見当もつかないらしい。
そんなことを考えながら、川口の船手番所へかかってゆくと、そこで、思いがけない人物が待っていた。

「おお、これは治部少輔どので」
宗室が座をすさると、博多の町割以来、深い顔なじみの石田三成は、せかせかと渡板をわたって来た。
「宗室どの、このたびはご苦労でござった」
「何の、これもご奉公でござりまする」
「実は折入って御前へ出られる前に貴老に頼みがあっての」
それを聞くと宗室はそらとぼけた。
「はて、これは何であろう。飛ぶ鳥おとす勢いの殿下のご奉行が、このわしに……」

二

三成は、船のかた隅に控えている宗室の手代たちに、
「その方どもは、ちと土を踏んで来い」
と、軽く言った。
「わしは、ご老体に話がある」
手代たちは、鄭重に頭を下げて宗室を見やった。宗室はそれに、降りていよと頷き返して、
「秋の川筋の風景は、心に沁みまするなあ」
「いかにも」三成は、この前博多で見た折よりはずっと成長した感じであった。世間で言う貫禄がついたというのであろう、小肥りの躰を、ゆっくりと刀を取って宗室の斜め

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com

前に坐ってゆくと、
「もはや頼みとするは貴老だけじゃ」
と、眼で笑った。
「この老いぼれを頼みになさる……？」
「殿下はの、眼の中に入れても痛くない若君を失われた」
「伺って居りまする」
「それが原因での、一時は世も捨てかねまじきおん嘆き……ところがそのおん嘆きの反動が、とんだ方向へそれられての」
「ほう、とんだ方向と仰せられますると」
「大明国のご征服じゃ。はじめにはご冗談とばかり思うていたに、ご冗談どころか、それが生涯の仕事のお仕上げじゃと、大まじめに仰せられる」
「それで……」宗室は、三成が何を言おうとしているか、よくわかっていながら、依然として空とぼけた。
「これは思いとどまって貰わねば相成らぬ。ようやく天下は平定したとは言え、民百姓の疲れには根深いものがある。今そのような戦を起しては、国の破滅にもなりかねぬ」
「ほう、それは一大事でござりまするな。で……お奉行さま方は、ご反対なされましたので」
「それが、貴老も知っての通りのあのご気性じゃ、われ等がお諫め申したとて聞き入れぬ。貴老はこのたび朝鮮の地をすみずみまで見て来られた。そこで、このご出兵は思いとどまるように、前途に難儀が山積すると、申上げて欲しいのじゃ」
宗室は皮肉に笑った。そして大きく手をふりながら、
「それはご免蒙りまする。お奉行さまがお諫め申上げてもきき入れぬものを、何でこの年寄りなどが……何とぞそれはお奉行さまがなされまするよう」
「島井どの！」
「そのような儀は平に……」
「われ等の頼みをお聞き入れ下さらぬと申されるか」
「治部さま」宗室は声をおとして、じっと額に上目を据えた。
「それは、治部さまお一人のお考えか、それとも宗室にそう申付けるようにと、小西さまのお指図も加わってか」
「これは異なことを聞くものじゃ。小西どのもわれ等にご同意だったら何とするのじゃ」
「フフ……そのようなお指図はお受け致しかねまする」
「なんじゃと!?」
「小西どのには、この宗室から善後策はすでに申上げてござりまする。それに何ぞや、指図がましい。島井宗室は、殿下直々のご命令で彼地を仔細に見て来たもの、その報告

に、誰のお指図も受けませぬ」
きっぱりと言って宗室はまた笑った。

三

三成の眼にはげしい憎悪が宿っていった。
(たかが町人の分際で!)
そうした感情がむき出しになっている。
「そうか、では、この三成の頼みなど聞けぬと言うのじゃな、わしは指図などとは言わなんだ。辞を低うして、折入って頼みがあると申した筈じゃ」
「その頼みが、指図だと申上げたら何と致しまするので」
宗室も負けてはいなかった。むしろ若い三成を揶揄する調子さえふくまれている。
肌に寒い川風が、二人の間を白々と吹きぬけた。
「フフ……」と三成も蒼白く笑った。
「聞けぬとあれば、当方にも考えがある……と、申すと、無頼の徒の売り言葉に買い言葉、では三成黙って引下るより他にないかの」
「治部さま」
宗室はもう一度せせら笑って、
「あなた様にしても、小西どのにしても、自分勝手なお人じゃなあ」
「そういうものであろうかの」
「自分たちがご意見申上げたら、或いは殿下を怒らせて、切腹か、お手討ちか……それゆえこの諫言は宗室にやらせよう……宗室とて、怒らせたら生命にかかわること。それでご近習のご奉公が勤まるものならば、武士というは勝手のよいものじゃ」
三成の顔は一段と蒼くなった。
これほど相手がつけつけと物を言うとは思っていなかったからに違いない。
それにしても、小西行長に頼まれて来たことまで、宗室が知っているのが腑におちなかった。
「では頼みは引っこめて、引きさがった方がよいかの」
「仰せの通り、小西どのが生命を賭けて、彼地へのお先手を勤める……そのご決心の出来ないうちに、私に諫言せよなどと身勝手を申されてもお受けは致しかねまする」
「なに、小西どのにあの地のお先手……!?」
「治部さま、それより他に手段はござりますまい。殿下は小西どのや、宗どのの言葉を真っ正直に受取られ、朝鮮王は日本軍の先導を勤めるものと信じて大軍をおすすめなさる……ところがわしの見る眼は違う。その結果がどうなるか、よくお考えなされませ」
三成はびっくりしたように身をのり出して声をおとし

た。
「すると貴老は、そのことを小西どのに申し通してあったと言われるか」
「いかにも。よくご存知でおわす筈じゃ」
「では、では、小西どのがその先手を勤める覚悟ならば、貴老もわれ等の頼みを聞き入れようと言われるのか」
宗室はこくりと頷いて又笑った。
「治部さまも、万一の時には、小西どのを先手に遣わし、先ずもって彼の地の軍勢の動向をさぐらせる……と仰せられるならば、この宗室も男でござりまする。わざわざお頼みなどなさらずとも、始めから生命は投げ出してご諫言する気でござりまする」
「宗室どの！」
三成ははじめて宗室の真意を知って、いきなり膝から手をおろした。
「この通りじゃ、小西どのの方は、三成誓って引受くれば……」
「ハハ……お手をおあげなされませ。ひと目がござりまする。お奉行さまが、そのような……」
宗室は、声をたてて又笑った。

四

三成は呉々も宜しゅうと、繰返し繰返し宗室に頼んで船をおりていった。
その後姿を見送って宗室はまた、
（武士とはおかしなものぞ……）と、考える。
義理というふしぎな飼料で飼われていながら、主人に毛程の隙でもあると、すぐさま商人以上の狡るさで私念をはさんで来る。金儲けに徹しもならず、さりとて義理にも徹しきれずに、武器なき民を見下して生きている……
船はこのあたりから満々とした水面をすべるように進んでゆく。
淀屋の橋ぎわに船が着いたのは八ツ近かった。
ここにもすでに町方衆の揃えた供ぞろえが乗物を持って待っていた。宗室は出迎えている淀屋にも、
「御用が済みますまでは……」
小さく会釈しただけで乗物におさまり、そのまま大坂城に向っていった。
秀吉はこれも、新しい伏見城からわざわざ大坂へやって来て、宗室を待ちかねていた。
両側には、すぐさっき川口で会った石田三成をはじめとし、増田長盛、前田玄以、織田有楽、長束正家、大谷吉継などの面々が居並び、正面の秀吉は脇息の下に膝を入れ、紫の頭巾の下でこぼれるように眼を和ませている。

「おお、宗室か、ご苦労であった。大儀であった。長い船旅で色が黒うなったようじゃぞ」
宗室が挨拶しようとする頭上へ例の天衣無縫な言葉の雨であった。
「承りますれば、殿下にはご大切な若君さまをお失い参らせ……」
「それは申すな。それはもうよい宗室、やっと忘れたところじゃ。近う近う」
「これは恐れ入りました」
「してどうじゃ彼の地の模様は。隅々までよく人心を見きわめて来たであろうな」
「はい。殿下直々のご命令ゆえ、まず釜山に上陸し、装いを変じまして、慶尚道から江原道に参り、京畿に入り、黄河、全羅の順で、経めぐってござりまする」
「大儀であった。して、山河の形勢、道路、駅站の模様など認めて参ったか」
「はい。これが、その絵図面にござりまする。この絵図面に、軍備の精粗、人情の勇怯、降雨の多少、産物の数量品名などあとう限りこまかく書込んでござりますれば、ご披見を」
「よし、長盛、それをここへ持て」
「はっ」
増田長盛が絵図面を受取って秀吉の前にひろげてゆくと、秀吉はそれをニコニコと見やって、
「やはり、軍勢は釜山にあげ、それから京畿へすすめるがよいかの」
「軍勢……と、仰せられますると」
「おお、そなたにはまだ話さなんだの。実は加藤清正をすでに九州へ出発させたぞ」
「九州へ加藤どのを……？」
「そうじゃ、肥前の名護屋へ築城するがよかろうというのでな、その縄張りを即刻に命じたのじゃ。ここを根拠地として続々と大軍を釜山に渡してゆく。進軍を開始したら一挙に明の都まで攻めのぼる。来年のお盆にはわれ等はもはやその地に住もうて四百余州へ号令していよう。いや、大儀であった。いま盃を取らそうぞ」
機銃を浴びせるような秀吉の言葉の下で、
「恐れながら、その儀は、そのようには相成りませぬ」
宗室の言葉が凛と一座へひびきわたった。

五

「なに、そのようにならぬとは？」
秀吉はわが耳を疑うように、
「何がいったい成らぬというのじゃ。来年の盆までには…

…」
「その儀でございまする。仮りに朝鮮王が双手をあげてご案内に立ったとしても、そのように早急な進軍など思いも寄りませぬ」
宗室は声を張ってさえぎった。
「宗室、こなた、おかしなことを申すの」
「いいえ、仔細に調べて参りましたご報告を申上げて居るのでございまする」
「こなた、仮りに朝鮮王が双手をあげて案内に立ったとしても……と、申したな」
「仰せの通りにございまする。しかし、それはどこまでも仮定でございまする。李王はご案内には立ちますまい」
「何を……何を証拠にそのようなことを申すのじゃ。昨秋使者が参った節、その儀はしかと申付けてあるのじゃ」
「恐れながら……」
宗室はぐっと下腹に力を入れて秀吉を仰いだ。その眼はふしぎな気魄を宿して星のように光っている。
「それがしの調べましたるところでは、李王は長い間明国と親交を結んであれば、決して明を裏切って、殿下にお味方することはございますまいかと……宗室の眼には、そう映ってございまする」
秀吉は軽く笑った。
「よいよい。そちは商人じゃ。戦のことは予に任せ。李王は必ずわれ等の命に従うぞ」
「仲々もって！」
と、宗室は首を振った。
「殿下の軍勢がお渡りあれば、李王は直ちに明軍を国内へ導き入れましょう。そうせねばならぬ義理が彼の国と明との間にはあると見てとりました。それゆえ、戦となれば明国へ入るまでに、どのような費えがかさむか計り知れぬものがあろうと存じまする」
「宗室！」
「はいッ」
「するとそちは、わしの思案にぬかりがあると申すのか」
「仰せの通りにございます。恐らく日本国中の物資、黄金、軍勢の八割以上を投じても、或いはご無理では……と、見てとって参りました」
「すると、そちは、わしに出征を思いとどまったがよいと言う意見か」
「ただいまは、思いとどまるが上策かと存じまする」
「ハハ……」
と、もう一度秀吉は笑った。
「そち、誰かに、反対してくれと頼まれたな」
「決して、そのようなことはございませぬ。見たまま、思

うたままをご報告せねば相済まぬと存じて申上げるのでござりまする」
「秀吉の計画にケチをつけてもよいと思うのじゃな」
「これはご聡明な殿下のお言葉とも覚えませぬ。殿下こそ途中でご決心を変更なされたもの……宗室は、わが身のご報告をよくご検討なされた上で、出征か否かをお決めなさるものと存じて居りました。それに何ぞや、まだご報告も申上げませぬうち、さっさと計画をおすすめなされ、その上でケチをつけたなどとは思いも寄らぬ仰せられ方にござりまする」
「黙れ宗室！」
ついに秀吉は脇息を叩いて怒りだした。

六

「この秀吉が、いちいちそちの命に従わねばならぬいわれがあろうか。出征はもはや予自身が決めたことじゃ」
秀吉の声はピンピンと天井にこだまして、席に連る人々の耳朶を圧した。
宗室はぐっと一膝のり出した。
「これは、いよいよ心得ぬお言葉にござりまする。たとえ何誰がお決めなされた事であろうと、この宗室の報告が、そのため変らねばならぬいわれはござりませぬ。もし又、お決めなされたからと言うて、心にもない偽りを申上げたのでは、宗室、死後も御仏の許へは参れませぬ。それゆえ、お決めなさるは殿下、ご報告申上ぐるは宗室。宗室は、この戦、費えが多すぎますれば、十中七、八は失敗と見て参りました。これがご報告にござりまする」
「な……な……長盛！」
秀吉は身をふるわせてうしろに控えている小姓の太刀を指した。
「この不届者の首をはねよ。首途の血祭りじゃ」
宗室は微動もしなかった。以前より却って静かな眼ざしで、激怒している秀吉を見上げている。
（言うべきことはこれで言った……これだけ言われたら、秀吉もまた、小西や宗の先発の申出を聞くであろう。さすれば怪我は小さくて済む……）
「長盛！　何をためろうて居る。早く斬れッ」
「恐れながら……」
三成があわてて一膝すすみ出た。
「お怒りはごもっともながら、島井どのの申条、いましばらくご検討あって……」
「黙れッ。予が探って参れと命じたは、各地の地理や人情じゃ。それに何ぞや、出征がよいの悪いのと、わが身が関白でもあるかのような申条、無礼きわまる増上慢じゃ。斬

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com